

## 米大統領選 2 混戦の共和党指名争い、雇用回復でオバマ大統領のリード拡大

11月の大統領選に向けた共和党の候補者指名争いは8州での予備選・党員集会が終わり、獲得代議員数ではロムニー前マサチューセッツ州知事が105人で首位に立ち、その後をサントラム元上院議員が71人で追う展開となっている。ロムニー氏は大票田のフロリダ州と次のネバダ州で大勝したが、2月7日のミネソタ州などでサントラム氏が三連勝したことで、保守派への浸透に苦戦するロムニー氏の弱さが露呈した。ロムニー氏は次のメイン州を制したが、得票の伸び悩みは否めず、指名争いは長期化する見通しになってきた。一方で景気・雇用の回復に弾みがつき、オバマ大統領の支持率も回復し、ロムニー氏らに対するリードも広がってきた。

図表 1 共和党の予備選挙・党員集会の結果と獲得代議員数（2月11日まで）

月日	州・自治領等	獲得代議員数累計						得票率				
		ロムニー	ギングリッチ	サントラム	ポール	その他	非分配	代議員計	ロムニー	ギングリッチ	サントラム	ポール
<b>獲得代議員数累計</b>		<b>105</b>	<b>29</b>	<b>71</b>	<b>18</b>	<b>2</b>	<b>18</b>	<b>243</b>	-	-	-	-
1/3	アイオワ	12		13			3	28	25%	13%	25%	21%
1/10	ニューハンプシャー	7			3	2		12	36%	9%	9%	21%
1/21	サウスカロライナ	2	23					25	28%	40%	17%	13%
1/31	フロリダ	50						50	46%	32%	13%	7%
2/4	ネバダ	14	6	3	5	0	0	28	50%	21%	10%	19%
2/7	コロラド	9		18			9	36	35%	13%	40%	12%
2/7	ミネソタ			37			3	40	17%	11%	45%	27%
2/11	メイン	11			10		3	24	39%	6%	18%	36%

(注) 全代議員数は2,286人、過半数は1,144人。代議員数はAPの計算。

## 1. 共和党指名争いは、ロムニー氏優位守るも独走の気配は消える展開に

11月の大統領選に向けた共和党の候補者指名争いは、2月11日までに8州の予備選・党員集会が終わり、総代議員数の1割強の配分<sup>1</sup>が決まった。獲得代議員数で見れば首位は105人のロムニー前マサチューセッツ州知事、その後を71人のサントラム元上院議員が追っている。ロムニー氏はサウスカロライナ州でギングリッチ元下院議長に予想外の敗北を喫したが、その後は資金力と組織力で他候補を圧倒するロムニー氏が再び支持を伸ばし、フロリダ州とネバダ州では大差で連勝した。ロムニー氏は次のコロラド州でも直前の世論調査では高い支持を得て、独走する気配をみせていた。

しかし、2月7日に行われた同州の党員集会ではサントラム氏が予想に反して大勝した。サントラム氏は同日のミネソタ州党員集会でも、保守派が多い地の利を活かして予想通りの勝利を収めた上に、ミズーリ州予備選（拘束力なく人気投票<sup>2</sup>）も制して「三連勝」を収めた。同氏は初戦のアイオワ州の勝利の後は低迷が続き、保守派の一本化を狙うギングリッチ氏から撤退を求められていたが、息を吹き返して逆に差をつけた。ロムニー氏は次のメイン州を制したが、得票率は2位のポール氏と3%しかなく、獲得代議員数も同氏と分け合う結果に終わった。ロムニー氏は獲得代議員数や全米支持率では首位を守り、次のアリゾナ州とミシガン州の世論調査でも高い支持を得ていることから、ロムニー氏優位が続く見込みだが、独走状態までリードを広げることは難しそうである。

<sup>1</sup> 獲得代議員数はAPによる推計値。複数のメディアが異なる推計値を発表している。例えばCNNは2月11日時点でロムニー氏が115人、ギングリッチ氏が38人、サントラム氏が34人、ポール氏が20人としている。

<sup>2</sup> ミズーリ州の共和党は党員集会を3月17日に開催して代議員の配分を決定する。2月7日の同州予備選の結果は代議員の配分に強制力はない。事実上の人気投票である。

## 2. ロムニー氏の強さと弱さが示された最近の指名争い

### (1) 他候補を圧倒するロムニー氏の資金力と組織力

指名争いの1割強が終わった時点での一つの注目点は、資金力と組織力で他候補を圧倒するロムニー氏の取りこぼしの多さである。実際、ロムニー氏は資金力だけみても、他候補に大差がある。2月初めの連邦選挙管理委員会（FEC）の発表によれば、ロムニー氏が2011年に獲得した選挙資金は5,700万ドル強、年末の手持現金も2,000万ドルあった。これに対してポール氏とGINGRITCH氏の手持現金はロムニー氏の1割程度、サントラム氏にいたっては1%しか残していなかった。ちなみにオバマ大統領の手持現金はロムニー氏の4倍強あった。現職として知名度と08年に確立した集金マシンがあり、党内の指名争いに資金を費やさずに済むオバマ大統領の優位性が示されている。

図表 2 大統領選主要候補者の選挙資金（2011年）

					(100万ドル)				
現状	候補者	調達額	期末現金	対ロムニー比	現状	候補者	調達額	期末現金	対ロムニー比
立候補	ロムニー	56.07	19.92	100%	撤退	ペリー	19.78	3.76	19%
立候補	ポール	25.90	1.90	10%	撤退	ケイン	16.54	0.99	5%
立候補	GINGRITCH	12.65	2.11	11%	撤退	バックマン	10.10	0.36	2%
立候補	サントラム	2.18	0.28	1%	撤退	ハンツマン	5.88	0.11	1%
オバマ		139.53	81.76	411%	(資料)FEC, New York Times.				

図表 3 スーパーPACの資金調達・支出（2011年）

			(百万ドル)			
系列・支持対象	名称	主な活動目的	2011年調達額	大口寄付比率	過去12週支出額	中傷広告比率
ロムニー	Restore Our Future	GINGRITCH氏の中傷	30.2	98%	18.3	96%
GINGRITCH	Winning Our Future	ロムニー氏の中傷	2.1	98%	8.6	41%
ペリー	Make Us Great Again	ペリー氏支持	5.5	97%	4.0	0%
ポール	Endorse Liberty	ポール氏支持	1.0	98%	3.4	2%
ハンツマン	Our Destiny	ハンツマン氏支持	2.7	97%	2.5	0%
サントラム	Red White and Blue Fund	サントラム氏支持	0.7	86%	2.2	4%

(注)大口寄付は一口25,000ドル以上。(資料)New York Times.

今回の指名争いから初めて認められたスーパーPAC（特別政治活動委員会）という無制限<sup>3</sup>に政治資金を調達・支出できる政治資金団体の活用でも、ロムニー氏は極めて有利な立場にある。同氏とGINGRITCH氏のそれぞれの系列団体を比べても、2011年の資金調達額ではロムニー氏系列がGINGRITCH氏系列の15倍近く、過去12週間の支出額でも2倍以上の差がある。スーパーPACは献金者の氏名公開や特定の政党や候補者との直接のつながりがないという条件が課されているが、現実には候補者の元側近等により設立されて事実上の候補者や政党の系列団体となっていることが多い。しかも今回の指名争いでも、スーパーPACに対立候補の中傷広告を受け持つ別働隊を担わせるという同団体の使い道が早くも見出されている。実際、ロムニー氏の系列のスーパーPACはGINGRITCH氏を中傷するテレビ広告を重要州と位置付けたアイオワ州とフロリダ州で集中的に放映した。アイオワ州でのこのスーパーPACが中傷広告に300万ドルを投入したという。GINGRITCH氏も系列のスーパーPACが年明け以降に懸命に資金を集め<sup>4</sup>、フロリダ州ではロムニー氏の中傷広告に資金を投入した。同州の予備選直前の1月23日から29日におけるGINGRITCH氏の系列団体の支出額

<sup>3</sup> 従来の大統領候補者の選挙資金の調達方法は、候補者本人の自己資金・借入と個人からの献金集め、PAC（政治活動委員会）という政治団体による資金獲得であった。個人献金は選挙一回あたり上限2,500ドル、PACにも調達額の上限があり、企業や労働組合が単独で多額の資金を候補者に与えることは不可能だった。しかし10年の連邦最高裁判決により、企業や労働組合などの団体の表現の自由があることを認め、一定条件の下で無制限に政治資金を集めて使うことが可能な団体であるスーパーPACの設立が認められた。

<sup>4</sup> ラスベガスのカジノ王のアデルソン氏一族がGINGRITCH氏系列のスーパーPACに1,100万ドルを寄付した。

は434万ドル、昨年の資金調達額の2倍強を注ぎ込んだことになる。しかし、ロムニー氏の系列団体の支出額はそれを上回る616万ドルに達し、激しい中傷合戦を資金力で押し切った。

## (2) 保守派の取り込みに苦戦するロムニー氏

しかし、ロムニー氏が圧倒的な資金力と組織力を支持の拡大に結び付けられたのは、今のところ、このフロリダ州だけである。これまでの8州の獲得代議員数をみるかぎり、ロムニー氏は他候補との圧倒的な資金力と組織力の差をあまり活かしていない。昨秋以降に保守派が有力候補を擁立できず、出馬表明済みの保守派候補者の一本化にも失敗したことから、指名争いが始まれば資金力と組織力で独走するロムニー氏が保守派を取り込む、保守派もロムニー氏で妥協するとの見方が大勢だった。現に指名争いが始まると、ロムニー氏は保守派が多いアイオワ州で善戦<sup>5</sup>し、フロリダ州では保守派やティーパーティー運動支持者からも保守派の候補者を上回る支持を獲得して大勝した。同州の大勝直後にはロムニー氏の保守派取り込みが始まったとの観測も強まり、独走の気配もあった。

しかし、保守派の妥協への動きが確認できたのはこの2州だけである。ロムニー氏が勝ったニューハンプシャー州とメイン州は地元マサチューセッツ州に近く、ネバダ州はモルモン教徒の数が多いう地の利があり、保守派の支持拡大は勝利に必要なではなかった。逆にコロラド州とミネソタ州は08年には保守派有力候補が不在の中でロムニー氏が大勝したが、今回はサントラム氏らに支持を奪われて敗れている。ミズーリ州予備選でもロムニー氏の支持率は08年の党員集会を下回った。これまでの指名争いをみるかぎり、保守派のロムニー氏に対する抵抗感は予想以上に強く、ロムニー氏の独走の可能性は消えて、指名争いが長期化する可能性が高まってきたといえる。

## (3) 実効税率問題と雇用回復の加速でロムニー氏の「勝算」が低下

世論調査や予備選・党員集会の出口調査によれば、ロムニー氏が支持される最大の理由は、共和党の候補者の中でオバマ大統領に勝算のある唯一の候補という評価である。昨年夏以降、経済運営がオバマ大統領の最大の弱点であり大統領選の最大の争点とみられてきた。その経済運営についてオバマ大統領よりも期待できるとの評価を得続けてきたのがロムニー氏であり、それが効いてオバマ大統領と共和党の候補者の仮想投票でもロムニー氏だけが大統領と互角か若干上回る支持を集めてきた。指名争いでも、保守派がロムニー氏支持に傾くとすれば、同氏の経済運営とオバマ大統領に対する勝算が決め手になるとの見方が多かった。実際、フロリダ州ではロムニー氏を支持した保守派もティーパーティー運動支持者もロムニー氏の勝算を支持理由に挙げていた。

しかし、サウスカロライナ州の予備選からフロリダ州を除いてロムニー氏の勝算が不安定になってきた。サウスカロライナ州ではギングリッチ氏とペリー氏が、ロムニー氏が投資ファンドの経営者時代に行った投資先企業の大量の人員削減と同氏が申告所得額等の公表に消極的なことを指摘して激しい攻撃を仕掛けた。この攻撃とロムニー氏の反論の弱さで、ロムニー氏の印象は悪化した。フロリダ州予備選前にロムニー氏は申告所得額と納税額を公表したが、最近の実効税率がわずかに15%前後であることが判明したことも響いた。発表直後のフロリダ州の予備選こそロムニー陣営は資金力と組織力で押し切ったが、大統領選の争点の一つである税制改革に対するロムニー氏の発言力と説得力は大きく低下した。各種世論調査でも税制改革を任せるリーダーとしての信認といった問いでは、ロムニー氏はオバマ大統領に公平さで劣るなどの評価を受けて差をつけられている。

コロラド州など3州の党員集会・予備選の前週2月3日には11年12月の雇用統計が発表され、失業率が8.3%に低下、非農業部門就業者数が前月比24万人強増加するなど市場の予想以上の結果が出た。失業率はオバマ大統領の就任直後の09年2月以来の低さであり、雇用増加も2カ月連続の20万人超である。景気回復は市場で共有されてきたが、それに雇用の回復も伴う着実な展開に進化

<sup>5</sup> アイオワ州の党員集会では当初、ロムニー氏が僅差で勝ったと発表されたが、票の再集計によってサントラム氏が逆転した。だが、保守派の多い同州でのロムニー氏の第2位の得票は高く評価できる。

してきたわけである。これに前後して、消費者信用の回復など家計のバランスシート調整が一服した可能性を示唆する動きもあった。オバマ政権も慎重さを保ちつつ、景気と雇用の回復のペースが上がったという実績をしっかりと訴えた。これに対して景気と雇用の低迷が続くことを当然視してオバマ大統領の失政と攻撃してきたロムニー氏らに共和党の候補者は攻め手を一つ失う格好になった。

雇用統計の発表後、ロムニー氏らは失業率がまだ異常な高さである、自分が大統領なら今頃はもっと雇用が回復していたなどとオバマ政権への批判を続けているが、有権者への説得力を欠いていることは否めない。現にオバマ大統領の支持率は雇用統計の発表後に不支持率を超え、足元では**49%**に迫っている。不支持率**47%**弱との差は**2%**ポイント、昨年6月以来の差である。オバマ大統領とロムニー氏の仮想投票も雇用統計発表後の世論調査ではオバマ大統領のリードが**5~7%**に拡大している。景気と雇用の回復に弾みが付き始めたのならオバマ大統領を交代させる必要はない、ここでロムニー氏に代える必要などないという有権者が増え始めているとも読み取れる結果である。

#### (4) 保守票の一時的な迷走、ロムニー氏指名の流れは変わらず

実効税率の低さやその発表の前後の対応が一因となったロムニー氏の大統領としての資質への疑問、景気と雇用の回復がロムニー氏の勝算を弱め、それを知った保守派がロムニー氏指名を容認する根拠を失い、行き場を失った保守派の票が指名争いに残り、保守派にとって最も安心できるサントラム氏に流れた。そのように解釈しないと、資金力と組織力でロムニー氏に絶望的な差をつけられているサントラム氏の**3**連勝は説明できない。共和党内でも、ロムニー陣営の中傷広告に頼りすぎる選挙戦術では保守派が敬遠する、保守派の熱気呼び起こせないとの批判が出ているという。

もっとも、予想外の善戦を続けるサントラム氏がロムニー氏を追い抜くという見方は少ない。同氏が2月10日までの3日間で**300**万ドルの選挙資金を獲得するなど勢いを得てはいる。景気回復が進めば、保守派の関心は経済から中絶や同性婚など社会的問題に移り、宗教・社会保守のサントラム氏に有利に働くという見方もある。だが、サントラム氏には今後の長い選挙戦を支える資金力と組織力がない。無党派層も保守色が強すぎるサントラム氏は敬遠する。仮想投票でもオバマ大統領はサントラム氏に**10%**前後の大差をつけている。ギングリッチ氏の再浮上も難しい。地元ジョージア州など南部では同氏が勝つ州もあるが、過半数の代議員を獲得できる資金と組織はない。同氏は8月下旬の全国党大会まで戦い続けると宣言しているが、今後、資金の制約から活動を続ける州を絞らざるを得ず、南部重要州での予備選が終われば存在感を失っていくとの見方が多い。

2月11日まで3日間にわたりワシントンで開催されたCPAC<sup>6</sup>（保守政治活動会議）の2012年総会は最後に模擬投票を行い、ロムニー氏が**38%**の得票を得て首位になった。次はサントラム氏の**31%**、ギングリッチ氏は**15%**、ポール氏は**12%**だった。保守派の最有力団体は、依然としてロムニー氏の受け入れに抵抗は強いが、サントラム氏の選択は現実的でなく、ギングリッチ氏とポール氏は圏外、最後にはロムニー氏指名でまとめるという保守派の総意を表したといえる。ただ、共和党全国委員会が3月末までに予備選・党員集会を行う州での代議員数の配分を原則的に比例配分としたために3月6日のスーパーチューズデーでは一人の候補者の大勝はなく、4月も指名争いが続く見通しである。スーパーPACにより候補者の選挙資金が従来よりも枯渇しにくくなったとして、終盤戦まで指名争いが続くという見方も出始めている。

### 3. 展望：長期戦の末にロムニー氏指名へ、オバマ大統領のリードは拡大

#### (1) 共和党の結束に禍根を残す中傷合戦は止まらない

RNC（共和党全国委員会）は当初、指名争いの長期化が候補者同士の競争とメディアの注目から、

<sup>6</sup> Conservative Political Action Committee の略称。毎年2月に開催されるCPACの年次総会は保守派の牙城であり、今年は1万人近くが参加、模擬投票にも**3,400**人余りが投票した。

一般投票に向けた同党内の熱気を高めて有権者にも同党の候補者の名前を浸透させられると考えたようである。だが、現実にはスーパーPACの登場もあり、ロムニー氏とGINGRITCH氏の激しい中傷合戦が続けられ、それが首位のロムニー氏の保守派への浸透を妨げ、保守派を中心に党内の熱気が高まらないというRNCの意図から外れた展開をもたらした。実際、中傷合戦が激化したフロリダ州以降の予備選・党員集会はメイン州を除いて08年よりも投票率が下がっている。しかも共和党の候補者が知名度を欠く中で過度の中傷合戦が、有権者全体の共和党とその候補者に対する信認低下をもたらしているとの見方も多い。共和党にとっては指名争いを早く終わらせて、一般投票でのオバマ大統領との対決に集中する方が明らかに望ましいが、現実には首位のロムニー氏が早期に過半数を確保する可能性も、他候補が徹底する可能性もどちらも低く、指名争いの長期化は確実になっている。候補者を鍛えるという意味では中傷合戦にも一定の効果は期待できるが、候補者間の政策の議論は深まらず、一般投票に向けてオバマ政権よりも優れていると有権者に意識させる政策の組み合わせの用意も進まない。これまでの指名争いの展開は共和党にとってかなり悪く働いており、一般投票で対決するオバマ大統領という敵に塩を送るに近い行動と判断を続けてきたといえる。

その共和党は中傷合戦が主体の選挙戦を止められるのか。中傷合戦の発端は初戦のアイオワ州党員集会の前のロムニー陣営によるGINGRITCH氏攻撃であり、GINGRITCH氏がサウスカロライナ州で反撃、フロリダ州では両者激突になった。同州予備選の前週放映の選挙広告の92%が両陣営による中傷広告だった。ロムニー陣営では保守派への浸透を図るための戦略転換が検討されているといい、CPACでも候補者に建設的な競争を求める声が出た。しかし資金力がないのに全国党大会まで撤退しないというGINGRITCH陣営が中傷広告を自制するとは思えない。逆に追い込まれて激しい中傷広告に活路を求める可能性の方が高いだろう。両陣営の中傷広告を仕掛ける別働隊となったスーパーPACが自制するとも思えない。今後、指名争いが長期化して中傷合戦が続き、共和党の団結や無党派層の共和党候補に対する印象悪化などの禍根を残してしまう可能性の方が高そうである。

## (2) オバマ大統領への怒りを表すだけで、大統領候補を擁立できない保守派

ロムニー氏は保守派の取り込みに苦戦しているが、問題は保守派が一体になって支持できる大統領候補を擁立できなかったことにもある。現在の共和党内での保守派の影響力を拡大させ、同党を従来より右傾化させたのはティーパーティー運動である。この運動の発端は09年半ば以降、金融危機対策や医療保険制度改革を進めたオバマ政権への反発であり、自由主義と小さな政府を信奉する自らの価値観や主義、国家像が侵害されることへの怒りの表明として保守派からも支持された。10年の中間選挙では、ティーパーティー運動と保守派、議会共和党指導部はオバマ大統領と民主党に対する怒りを示すという目的で一体化し、下院で多数派を奪還するなど共和党の大勝に結びつけた。

保守派といっても、古くからその内部は自由放任主義から穏健派に近いグループまで思想に相当の幅があり、派内に共存する財政保守派と宗教・社会保守派の間では価値観に大きな違いがある。ティーパーティー運動を支持しない保守派もいる。派内には妥協を裏切りと捉え、純化指向の強い精力もあるために利害調整は容易ではなく、一つにまとまるのは、冷戦下のソ連や大きな政府指向の民主党政権などが共通の敵がいるときであった。10年の中間選挙も同様であり、保守派は、大きな政府を目指しているとみたオバマ大統領と民主党に対する怒りを訴えることで一致し、共和党指導部や穏健派もその勢いを利用した。選挙の争点もオバマ政権と議会の上下両院の多数派であった民主党の評価であり、共和党も保守派も内部の利害調整に掛ける労力は限定的で済んだ。

大統領選は全く違う。価値観、思想、主義の違いを超えて支持できる一人の候補を擁立する必要がある。しかし、80年代のレーガン大統領のように個人としての魅力とリーダーシップを持つ人物は出現しなかった上に、11年の議会の機能不全が示すように保守派には候補者を一本化できる調整機能もなかった。結局、保守派の候補者が乱立して支持が分散し、3割弱の支持を得るだけの穏健派のロムニー氏が首位を走り続ける展開を招いてしまった。指名争いの中やCPACでレーガン大統

領の名前が数多く語られることをみても、保守派が約四半世紀にわたってレーガン大統領を超えるリーダーを発見も擁立もできていないことが分かる。しかも今は保守派内部の調整機能が非常に弱い。穏健派のロムニー氏が保守派に浸透するのに時間を要するのも当然なのだろう。

### (3) オバマ大統領のリスク要因は、景気減速と共和党の団結を誘発する政策・発言

共和党の指名争いが長期化した末にロムニー氏が選ばれるとして、一般投票はどうか。景気と雇用の回復が現状のペースで持続すれば、オバマ大統領は一段と有利になる。ただバーナンキ FRB 議長の米国経済に対する慎重な見通しを踏まえると、現状の勢いで景気と雇用の回復が続くとみるのは楽観的過ぎるだろう。欧州債務危機やイラン情勢などのリスクも残っている。安定的な景気回復が標準シナリオとしても、今秋までオバマ陣営が懸念を強める一時的な減速局面は起こりうる。その数と規模によってはロムニー氏がオバマ大統領にとの差を詰めて接戦に持ち込む可能性はある。

共和党と保守派には、オバマ大統領の再選阻止という重大目標もある。各候補が繰り返しオバマ大統領を一期で終わらせ医療保険制度改革を元に戻すと訴えて、聴衆の支持者から歓声が上がっていることをみても、その怒りの強さは理解できる。1月下旬にオバマ政権は企業・団体が職員に提供する医療保険の適用対象に避妊薬を含めるよう義務付ける規制案を打ち出して、カソリック系団体を中心とする避妊反対派から激しい反発を受け、宗教系団体への規制案を撤回した。可能性は低いですが、オバマ政権が今後もこのような保守派を刺激する動きを重ねれば、保守派や共和党が結束を強め、選挙戦への熱意が予想外に高まる可能性もある。

### (4) 総合判断：混戦続く共和党の指名争いの勝者はオバマ大統領ではないか

以上の評価を総合すると、サウスカロライナ州からメイン州までの共和党の指名争いの勝者はロムニー氏でもサントラム氏でもなく、オバマ大統領であろう。ロムニー氏が保守派の取り込みで苦戦する間に景気と雇用回復に弾みがついてオバマ大統領の支持率が上がり、それがロムニー氏の勝算を下げて保守派がますますロムニー氏の支持を躊躇するようになり、指名争いの長期化の観測が強まった。激しい中傷合戦が中心を占める選挙戦は、競争を通じて政策を練り上げ、オバマ大統領との対決に向けた共和党の団結と熱気を高めるという展開を困難にしているため、長期戦はメリットよりも弊害のほうが大きくなっている。この3週間の共和党の指名争いを経て、オバマ大統領がロムニー氏であろう共和党候補に勝つ可能性は5%前後高まったと考えられる。

景気と雇用の水準は低く、世論のオバマ大統領の経済運営に対する評価は依然として厳しい。大統領にとって再選を楽観できるとは到底言えない情勢である。今後の景気・雇用の回復も、欧州債務不安やイラン情勢と原油価格の行方など懸念材料が残る中、急減速するリスクは消えていない。今は熱気には程遠い共和党も、オバマ大統領の再選阻止という重大な目標はある以上、指名争いの決着が早まれば、その後の団結と熱気は相当に強まる。オバマ大統領の現状のリードも磐石ではない。

もっとも上記のリスク要因が従来よりも膨らんだわけではない。やはり、オバマ大統領のロムニー氏に対するリードが広がった分だけ、大統領選の選挙戦についての現状の総合判断も、オバマ大統領・民主党が有利に傾いたという見方をとるべきだろう。

以上/今村

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料の提供する情報の利用に関しては、すべて利用者の責任においてご判断ください。当資料に掲載されている情報は、現時点の丸紅米国会社ワシントン事務所長の見解に基づき作成されたものです。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当事務所は情報の正確性あるいは完全性を保証するものではありません。当資料に記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は、出所をご明記ください。